

# 内科学系血液膠原病内科学分野

## 私たち血液膠原病内科医局の特徴

- ・分子標的薬や抗サイトカイン療法など内科系の中でも特に進歩がめざましく、やりがいのある領域です。
- ・地域の基幹病院として多数の患者さんの専門的診療を担っております。
- ・全身疾患の診療を通して総合的な診療能力を身につけることもできます。
- ・研究活動にも力を入れており、学会発表・論文投稿を積極的に行っています。
- ・出身学校・初期研修病院による待遇の差はありません。



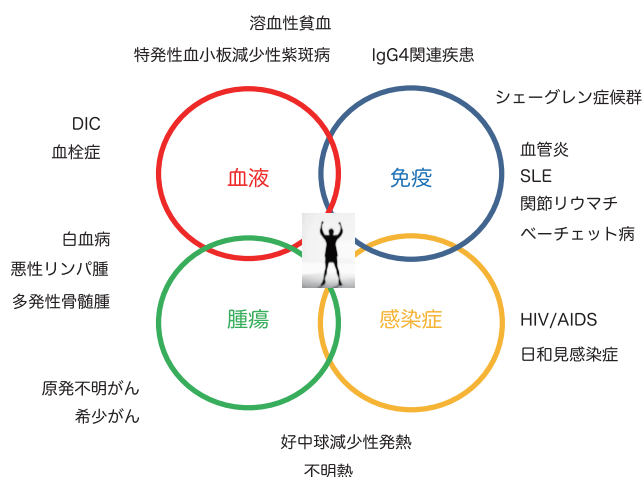
### 教室の概要

われわれ血液膠原病内科は旧第一内科から数えて創立76年になる伝統ある医局です。主に①血液疾患、②原発不明がんを含む固形腫瘍、③リウマチ・膠原病・血管炎症候群、④アレルギー疾患、⑤HIVを含む日和見感染症、⑥不明熱などの患者さんの診療を行っております。いずれも全身疾患であり、臓器特異的な知識に偏らず患者さんの全身を統括的に診療し、血液・腫瘍・免疫・感染という専門領域のスペシャリスト（下図）かつ内科領域全般の知識を有するジェネラリストとして日本全国で通用する有能な医師を育成しております。コロナ禍においてもわれわれの需要は大きく落ち込むことなく、チーム医療実践のため、医師だけでなく看護師、臨床検査技師、薬剤師とともに診療・研究・教育にあたっております。地域の基幹病院としての役割も担っ

ており、大学病院でありながら血液・膠原病ともに豊富な症例に恵まれているため、様々な疾患の修練を積むことができます。

膠原病では他大学基幹病院と連携し、当院が中心となってハイリスクリウマチ・膠原病ネットワーク網の構築や日本シェーグレン症候群患者会やNPO法人の事務局としての活動などにも積極的に貢献しております。

専門分野だけでは各分野にまたがる疾患を抱えた患者さんのニーズに対応できないため、当科が中心となって他科と連携をすすめて、上記のような多くのセンターを運営し、より多くの患者さんの治療に役立てるように対応しております。



- ・ 輸血・細胞治療センター
- ・ 腫瘍センター・外来化学療法室
- ・ 免疫制御治療地域医療センター
- ・ 造血幹細胞移植センター
- ・ アレルギーセンター

左) 当科の専門分野の概念図 右) 当科が運営する各種センター

### 教室主要スタッフ



部長・免疫細胞治療センター長：	中村 英樹	主任教授
科長：	北村 登	准教授
外来化学療法室長・腫瘍センター長：	三浦 勝浩	准教授
輸血・細胞治療センター長・教育医長・外来医長：	高橋 宏通	准教授
病棟医長・救急担当医長：	中川 優	助教
医局長：	長澤 洋介	助教

### 臨床研修の概要

卒後2年間の初期臨床研修終了後は内科専門医制度の下、内科専攻医として内科学の研修をしていただきます。本学の内科専攻医プログラムは柔軟性が高いため、血液内科、膠原病リウマチ内科、腫瘍内科を専攻することを決めている方は内科学の研修と合わせて専門領域の研修を進めることもできます。

血液膠原病内科分野では専門領域によって血液班、腫瘍班、膠原病班の3つの班があり、その配属は本人の希望により決定します。希望者は3領域にわたる専門研修も可能です。腫瘍センターを運営しており、原発不明がんを中心とした固形腫瘍の化学療法も行なっているため、がん薬物療法専門医取得も目指せます。下記が当科で取得可能な専門医・認定医になっております。

研究についても計画段階から懇切丁寧に指導し、意欲さえあれば初期研修医の間であっても学会発表や論文投稿まで行うことができます。学位取得を目指す方には大学院コースも用意されており、内科学・専門領域の研修と並行して取得を目指すことも可能です。

- ・総合内科専門医
- ・血液専門医
- ・リウマチ専門医
- ・がん薬物療法専門医
- ・アレルギー専門医
- ・造血細胞移植認定医
- ・日本輸血・細胞治療学会認定医



左) 当科で取得可能な専門医・認定医 右) 2018年日本血液学会での発表後の集合写真

### 臨床・基礎における研究内容

研究は大きく血液・腫瘍グループ、膠原病グループの2つに分かれております。基礎研究から臨床研究まで幅広く行っていますが、とくに臨床研究では豊富な症例に恵まれているのが特徴です。

血液・腫瘍グループでは、日本成人白血病研究グループ (JALSG)、関東骨髓移植グループ (KG SCT)、関東慢性骨髄性白血病 (関東 CML) 研究グループ、悪性リンパ腫治療研究会 (SOLT-J) など造血器腫瘍の治療や遺伝子解析に関する共同研究に参加しております。これらのグループでは日本大学が研究の中心的役割を果たしているため、当科の医局員が多数の論文や学会発表を筆頭著者 (演者) として行っております。当科独自の研究としては、活性化ビタミン D やレチノイン酸によるマクロファージの分化やプラスミノゲンアクチベーターインヒビター (PAI-1) の発現、白血病細胞と骨髄間質細胞の相互作用、非ホジキンリンパ腫における MYC や BCL-2 蛋白・遺伝子異常と予後の解析、急性・慢性骨髄性白血病や骨髄腫におけるリン酸化蛋白の発現、造血幹細胞移植における至適レジメンの臨床研究などを行っております。

膠原病グループでは、膠原病・感染症に対して最新のエビデンスに基づいた治療を実践ししつつも、新たな生物学的製剤・分子標的製剤などの治験も積極的に行っております。基礎研究としては関節リウマチの原因として EB ウイルス感染との関連に注目し、これまでヒト免疫化マウスにおいて EB ウイルス接種がリウマチ様のびらん性関節炎を発症することを世界で初めて示し、EB ウイルスの破骨細胞活性化への関与の機序を示した他、リウマチ関連遺伝子での国際特許を取得するなど精力的に基礎研究を行っております。臨床研究としては、リウマチ膠原病疾患における MRI を用いた潜在性心疾患の解析、口唇生検を基にしたシェーグレン症候群の解析、ステロイド性骨粗鬆症に関する臨床研究など行っております。

## 将来のキャリアについて

専門医や博士号を取得した後にはエキスパートとして診療および研究で後輩の育成や医学部における学生教育に活躍していただきます。専修医終了後、実績に応じて専修指導医や助手、助教に採用されます。また医局員のライフイベントについても一人ひとり最大限にバックアップし、結婚・出産・育児をしながらも研修および研究が続けられるように配慮いたします。現在も子育て中の医局員（男性）が3名ほどおり、保育園などへのお迎えや園行事の参加なども行いつつ、日々の研鑽を積んでおります。

## 関連病院への出張

サブスペシャルティー研修終了あるいは大学院卒業以降、出張に派遣されます。出張は地域医療の場で血液・膠原病を中心に内科全般の修練を積み重ねます。出張病院は連携の取りやすい地理の板橋区医師会病院と国立病院機構埼玉病院があります。

## 休暇

夏季休暇は2週間、冬季休暇は1週間、年間で合計3週間の休暇があります。卒後3年目は内科学講座全体で取り決めがあり別の取り扱いになります。

## 留学

海外・国内と経験者は多く、積極的に支援する方針で、補助制度もあります。

## イベント

学問面では海外の大学より有名な研究者を呼んで学内で講演会を開催しております。プライベート面では納涼会・忘年会は毎回こだわりのお店で開催されており、その他にも医局員同士でキャンプやバーベキューなどを企画して充実したオフを過ごしております。コロナ禍においては自粛せざるを得ないため、オンラインでの企画でニューノーマルに対応しております。

## 当教室で活躍中の若手ドクターたち





**西原 正浩 先生（膠原病グループ）2016年日本大学卒業**

- ・2021年 好酸球性多発血管炎性肉芽腫症に合併した末梢神経障害に対する抗IL-5抗体製剤の併用について、Modern Rheumatology 誌で報告。
- ・メッセージ「自分は膠原病診療を本格的に始めてからまだ日は浅いですが、とてもやりがいのある学問分野だと感じています。メリハリをつけ、楽しく働きたいと思っています。もし少しでも興味がある場合、ご連絡頂けたらと思います。」



**栗原 一也 先生（血液・腫瘍グループ）2018年日本大学医学部卒業**

- ・2019年 多発性骨髄腫において成熟性に関連する免疫表現型がボルテゾミブ治療成績に与える影響についての研究をMedical Oncology 誌に発表。
- ・メッセージ「良性疾患から悪性疾患は同種移植まで、幅広く血液疾患診療を経験でき、優れた指導医陣たちと、楽しく充実した毎日を送っています。私たちが先輩から受け継いだものを、未来の後輩たちに引き継いでいきます。ぜひ見学にお越しください！」

近年の需要増にも関わらず血液専門医・リウマチ専門医がん薬物療法専門医はまだまだ希少で、将来の活躍が期待されております。

ご興味のある方はぜひ一度見学に来てください。下記連絡先までいつでもどうぞ。

**問い合わせ先**

担当者

日本大学医学部内科学講座 血液膠原病内科学分野

医局長 長澤 洋介

〒173-8610 東京都板橋区大谷口上町 30 番 1 号

TEL：03-3972-8111（内線 2403）

FAX：03-3972-2893

E-mail：nagasawa.yosuke@nihon-u.ac.jp

ホームページ：http://www.med.nihon-u.ac.jp/department/hemrhem/